

氏名	塩見 直紀
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	第 121 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	ローカルメディアアーツ ～すでにそこにある豊饒の世界の再構築～
審査委員	主査 教授 高橋 悟 教授 佐藤 知久 教授 小山田 徹 教授 石橋 義正 松浦 さと子 (龍谷大学 政策学部教授)

## 論文の要旨

### 研究概要

本研究は筆者がこの 10 年、注目し、実験をおこなってきた「AtoZ」という古典的編集手法、表現技法を用い、ローカルメディアとして、ひとや地域（集落）、文化等の潜在性の可視化を試み、すでにそこにある豊饒の世界の可視化、再構築を試みるものである。

### 研究背景

筆者は 25 年前より 21 世紀の生き方、暮らし方として、「半農半 X (エックス=天職、生きがい、ライフワーク・・・)」というコンセプトを提唱してきた。1992 年、ブラジルで「地球サミット (UNCED)」がおこなわれたころ、「生物多様性/生命多様性」という言葉を知る。その概念では表現できていない世界があると感じ、筆者は「生命」を「使命」にかえた「使命多様性」という言葉をもって、未来を見つめてきた。使命多様性という言葉を得てから、人の見え方が変わったと感じている。現代はユーザーコンテンツ型の情報発信の可能性も格段にひろがってきた。個性を十分に発揮できる時代になっているのだが、かえって個性を失う結果となってしまっている。単一の市場。単一の文化。単一の大衆。いろいろなものがひとつになっていく時代。世界がどんどん「単一の世界 (one world)」になろうとしている (ヴォルフガング・ザックス、1996)。

筆者はそれをトランプゲームの「神経衰弱」に例える。カードがすべて裏返った状態にあるのがいまではないかと。そんな世界に筆者はあえて、AtoZ という「単一の手法」のみをもって、豊かな世界を取り戻す試みをおこなう。AtoZ で世界の解像度を大げさに言えば、26 倍する試み。可視化する怖さも、限界もある。それでも可視すべきものが、芸術家も未着手のものがこの世界にはたくさんある。それを一般市民と試みる。私たちは当たり前すぎて意識しないが、アルファベットというのは人類にとって、大発明だった。これがそもそも単一化を生んだ元凶だったかもしれない。そ

の流れはもはやとめることができないものである。いま、あえて、そのアルファベット 26 文字を使って、AtoZ という「型」、「制約」を活かし、「単一の世界」を刺激してみたい。Google は世界中の情報を整理し、世界中の人々がアクセスしやすくすることをミッションとするとしたとき、世界は驚いた。筆者がおこなう「Local AtoZ」プロジェクトとは、Google もできていない脳内の宝ものの検索をアルファベットというシンプルなアルゴリズムを用いて、自身や足元の地域、そして自身のテーマ（ライフワークなど）を可視化するムーブメント、市井の人による現代アートプロジェクトである。

本編は以下の 3 つのパートからなる。

第 1 部「Local AtoZ Project Story」では、古典的編集手法 AtoZ を活用して、人や地域（集落）の魅力の可視化をおこなう誕生背景、目的、「Local AtoZ」と呼ぶ CD ジャケットサイズの作品の設計思想までを時系列的、ストーリー思考で詳述する。「Local AtoZ」は半農半 X の誕生後、他者の X 発見のサポートをおこなう中で、「自分 AtoZ」を考えることの効果を実感するようになり、それをまちづくりにも応用するようになったことに始まる。京都府福知山市を中心に作品づくりを市民とおこない、輪のひろがりを見いだした作品リスト（都道府県、市町村単位）としてまとめ、「Local AtoZ」のひろがりを見いだした。

第 2 部「The AtoZ for AtoZ」では、Local AtoZ の考え方、思想、世界観について、54 の視点を提示する。キーワードは AtoZ 編集手法を使い、アーカイブ、アルゴリズム、ブリコラージュ、バンクシーのステンシル、キュレーションとケア、コンステレーション、断章、エディターシップ、フォーマット、汎用性、アイデンティティクライシス、型の力、革命性、乱世をどう編集していくか、制約と創造性、吉田初三郎にとっての鳥観図のように、図鑑といった順に並べられている。54 の視点と出会うことで、読者の思索が豊かになり、豊饒の未来を招来できることを意識した設計となっている。

第 3 部「Local AtoZ Works and Beyond」では、自ら手掛けた作品、制作を支援した作品、自主的に制作された Local AtoZ 作品を計 68 点を 1 点ずつ、誕生背景やそこから導かれたものなどを詳述する。本稿を今後、手に取る一般読者がそこから自身のテーマにアプローチをする際の助力となることをめざすものである。68 の作品の大半は Local AtoZ Project における定型=CD ジャケットサイズ、16 ページで編まれた作品であるが、一部、FM ラジオ番組や A5~A4 サイズの冊子も含まれている。また制作途上のものや独自のメディアで表現をおこなった作品リストも掲載している。68 の作品は「A=アフター」「B=本」「C=小さな市町」「D=大学」「E=教育」といった AtoZ26 のキーワードで分類をおこなっている。多様なテーマから、すでにそこにある豊饒の世界の再構築の可視化をねらった表現である。

## 審査結果の要旨

塩見直紀の発表は、論文「ローカルメディアアーツ～すでにそこにある豊穡の世界の再構築～」と作品展示「Local AtoZ Works 展～すでにそこにある豊穡の世界」からなる。展示はCD ジャケットサイズで統一された68冊の冊子で構成され、会場には芸術資源研究センター・カフェスペースが利用された。

塩見氏は、日本経済の転換期となった94年頃から「半農半Xという生き方」を提唱してきた。エコロジカルな暮らしと個人の探究心を両立させる21世紀のライフスタイルの提案としての塩見氏の著作は、国内だけでなく台湾や中国でも出版され反響を呼んでいる。今回提示された論文と作品は「半農半X」以降の塩見氏の展開を紹介する内容であり、ローカルな環境での暮らしと人や集落の潜在性を可視化し、「地域で生きること・働くこと・学ぶこと」をひらく創造的な実践である。中心と周縁の格差を解消し、多元的な世界の在り方を夢想させた情報メディアの発達は逆にグローバルな網の目に覆われた単一な世界を生み出しつつある。「Local AtoZ」という単一な方法による塩見の発表は、地球を覆う表層的な情報のカードをトランプの神経衰弱ゲームのように一枚ずつ裏返し、個人や集落が持つ潜在性を可視化する具体的な実践の報告が核となっている。

以下からは、塩見により発表された作品と論文の内容を紹介する。

### 【作品】冊子「Local AtoZ Works」（68作品）の展示

「Local AtoZ」は地域集落での暮らし・環境・仕事を持つ潜在性を26文字のキーワードで抽出し16ページの冊子として編纂する出版プロジェクトだ。これまで68の冊子が出版され個別のテーマが掲げられている。そこで扱われる対象は「綾部コミナス」や「自分らしく生きるを支える作業療法士AtoZ」など地域ケアに関わるものから「福知山ファミリーとシェアしたいおすすめ絵本AtoZ」や「ローカルビジネスのこころ AtoZ」、「養蚕遺産 AtoZ」、「たんぼラグビーAtoZ」まで多岐に渡る。一冊ごとに冊子を作成するにあたって塩見は行政や大学との連携、地域での聞き取り、ワークショップの開催、ローカルラジオ局や公募など多様な手法を活用する。塩見にとっては、冊子の作成だけでなく、どのようなプロセスを経て冊子を作るかが重視され、冊子の配布だけでなく、地域に豊かな関係性を配布することが目指されている。たとえば冊子「イシワタマリを介護する時に読んでほしいA to Z」は、将来の介護者へ向けて、自己の特性を書き出す事で認知症と共に「生きてゆくためのパスポート」となる。「AtoZ」というミニマルな形式は、例えば短歌という限られた文字数の形式を借りることで、日常の会話では掴むことも伝えることも出来なかった思いがカタチとなる事にも通ずる方法だ。塩見が実践してきた「AtoZ」という冊子作りは、地域の暮らしに関わる多様な場面で、誰もが気軽に取り組む事ができるようにデザインされ、平易さ・親しみ易さが大事にされている。ただし、塩見の「AtoZ」というシンプルな型は、安易な満足を与える自己啓発ワークショップの手法としてデザインされているわけではない。26という限られた要素であるからこそ、地域や個人が意識化できていなかった豊かな潜在性が可視化される深度を持つのだ。

### 【論文】

発表された論文は全3部より成る。第一部「local AtoZ project story」は、その設計思想を述べたもので、「AtoZ」というメディアムを獲得するまでの塩見の思考と行為の足跡を追った時系列的

なストーリー（散文形式）である。第二部「The AtoZ for AtoZ」は、それ自体が AtoZ の形式で、AtoZ というメディアの特性や可能性を記した断章的なテキスト群であり「AtoZ」の世界観が示されている。第3部「Local AtoZ Works and Beyond」は、実際に制作された AtoZ 本の事例集となっている。この構成は博士論文としては異質であるが、AtoZ というメディアの特徴が、手法やメディアを問わない「自由形」の表現がむしろ表現者を路頭に迷わせてしまうことを回避する点にあることを考慮すれば、必然とも言える。塩見が提唱した「半農半 X」と同様、AtoZ は「型」のメリットを活かしつつ、自由に動ける余白を残した「半方法」である。だからこそ、論理展開を記した散文と、余白を生かした断章による構成は、表現者としての塩見自身のあり方と、AtoZ というメディアがもつ特徴をともに反映させている。

#### 【審査評】

塩見氏のアプローチは、これまでの多くのマスメディアが、「遠く広く多くの人に」伝えることを主眼にしてきたことを反省的に想起させてくれる作品であり、メディアが「近く狭く個人やコミュニティが小さいほど」彩りが鮮やかになることを実感させる。手にとりやすくバッグにもすっぽり収まる CD サイズの冊子の愛らしさは多くの人に心地よさを与える。一方で塩見氏の論文は、作品「Local AtoZ」で試みられた成果や意義について検証する学術的方法ではなく、論文構成それ自体にも「AtoZ」という方法を使用した異色の構成を取っている。読者は時系列を追って内容を理解することよりは、関わる状況と照らし合わせてテキストを活用するという位置に自己を置く事で初めてその意義を納得できる。塩見はすべての人は辞書編纂者となり得るといふ。その意味では読者自身が辞書編纂者として関与する事が密かに求められている。豊かな暮らしの生態系を活かす古典的な方法論としては、クリストファー・アレクサンダーの「パターン・ランゲージ」が挙げられるが、塩見の「AtoZ」は、使用者の個別の状況に応えるための方法ではなく、使用者がすでに持っていた潜在性を浮かび上がらせることで、使用者自身が方法自体を見出すことを重視している。「A to Z」という方法の独自性をそこに見る。

塩見のローカルメディアアーツは「地方の情報メディア」としてのローカルメディアではなく、非営利、非商業、オルタナティブ、脱中心、民主主義を育む「コミュニティメディア」としての要素が強い。塩見の実践は、「すでにそこにあるもの」への認識や共有に加えて、思い通りにならないものに絡めとられず、どうにかやってゆくブリコラージュ的な「自治」にも繋がっている。今回の塩見氏のアプローチで注目されたのは、「コミュニティーナース」や「作業療法士」など職業としての認知度が低い領域を冊子で取り上げた点にある。彼らの仕事の特性を集落の人たちに紹介することは、ケアを受ける人達とケアする側の情報交換を円滑にするだけでなく、匿名の職業人としては顔のある人間としての対話を生み出すことを可能にした。今後の展開としては地域集落のプラスの面だけでなく、問題のあることをテーマにした AtoZ という提案もあり得るだろう。それは何か静かなローカルメディアとしての強度を与えることになるかもしれない。本研究は、文字であらわされた部分だけでなく、その実践の成果とそれに連なる人々の物語や関係全体が、着実に地方に育まれていく事を実感させる内容となった。

#### 【審査結果】

塩見直紀氏の研究制作は、4年以上の地道な活動の蓄積がベースにある非常に豊かな社会実装を伴う、稀有なプロジェクトである。それは提示された論文と68の冊子に加えて、行政や地域との

緻密で息の長い活動により具体化されてきたもので、まちづくりや地域の価値発見というジャンルに、特定のメディアを形式と実践の接点として持ち込むことの可能性を示した優れた研究である。審査では、表層的なローカルメディアの流行とは一線を画した塩見氏の豊かで、今後も終わることのない「天職」として氏の活動を高く評価し全員一致で合格とした。